

# 環境への取り組み

## Haruna Group 社会貢献

### ■ 基本理念

当社では「人と生態系との共存」を基本理念として、  
安全で美味しく、地球環境にやさしい製品づくりを目指します。

当社では、企業の成長発展と環境の保全育成が、持続可能な形で調和させていくことを  
重要な企業テーマとして認識し、環境保全育成に積極的に取り組んでまいります。

具体的には、当社が排出する汚泥や排水によって、地域環境へ大きな負荷をかけないように配慮するとともに  
環境への貢献を積極的に捉えて、河川の清掃活動や公園の造成開放を手がけてまいりました。

当社は、地域環境より大きな恩恵を受け今日に至りましたが、企業は社会の公器であり  
地域環境に大きな影響を与える存在であると認識しております。

地域環境への配慮なくして、企業の持続的成長発展は非常に困難であるとの認識のもと  
環境保全育成活動は、地域環境へ悪影響を与えないような配慮のみならず  
積極的に環境に貢献していくとの視点のもと、今後も環境への取り組みを考えてまいります。



## ■～地域社会貢献～ 1

### 唐沢川清掃活動

2000年より地域環境への貢献活動として群馬県北群馬郡から利根川へ続く唐沢川の清掃を唐沢川水利組合と協力し年1回の清掃活動を行っています。  
「唐沢川」は群馬町を流れる小さな川ですが、「利根川」へ合流する水が流れています。  
現在でもヤマメが住める環境の川です。私達はこの地元自然環境を都心の方々へ、また後世へ継続させるため、地域の皆様との協力で活動をおこなっております。



工場周辺を流れる唐沢川の清掃は今年で8年目を数え、継続した代表的な活動の一つです。皆様にお届けする、清涼飲料水を製造している生産工場である高崎市足門町では、日頃お世話になっている地元へ地域環境の向上を目指して、積極的に清掃活動を行っております。  
小さな努力から地球環境、地域貢献を考えています。



## ■～地域社会貢献～2

### 地域へ公園提供

2005年10月にハルナビバレッジの工場がある高崎市足門町に四季折々の草木を楽しめる緑地公園「ハルナコミュニティガーデン」を整備し、地元の住民の方々へ開放しております。



\*緑の地面にシートをひろげて、手作りのお弁当を食べましたが、ほんとうにごうかなごちそうになりました。青い空に桜の花びらがひらひら舞ってシートに座りながら上を見ると桜の花がいつも見ている桜とはまた違ってみえるのです。なんだかちょっと不思議な気持ちになりました。お腹も満たされ、心も満たされ、花見は良いです。こんなにも近くに桜を感じる場所があるとは、ハルナ公園は穴場です。

\*会社の帰りにふと立ち寄れる公園です。桜を眺めながらの宴もなかなか良いものです。快晴に恵まれて、満開の桜にとても目の保養をさせてもらいました。

地元の方からの  
ご意見



## ■～地域社会貢献～3

### 地元学校や団体への工場見学

当社では、地元小学校を始め群馬県議会・大学・商工会の方々へ工場見学を実施しています。

地域の方々へ当社工場を見ていただく事により、交流を深め

当社製品の製造工程をご覧頂き、製品の品質管理の徹底をご確認頂いております。

たくさんのお子様達から楽しかったと、お手紙を頂いています。

また大学生や大学院生の方々へ実際の物づくり現場をご覧頂き、

アントレプレナーシップに貢献をしていきたいと思っています。



#### 工場見学後の ご意見



○工場見学の前にわかりやすく説明していました  
だき、ただ見るだけでなく、理解の伴う見学が  
出来ました。

○メーカーは、使用する側の要望や使い勝手  
に配慮して、様々な工夫や企業努力をしてい  
ることを知りました。

○原材料から製造の過程に至るまでの安全・  
安心の確保に関しては特に関心を持ってい  
たところですが、工場内は全自動化されてお  
り、衛生管理は大変行き届いていました。最  
後に完成された製品を人がチェックしている  
ところを見て、安全・安心な製品をつくること  
を何より大切にしていることを感じました。

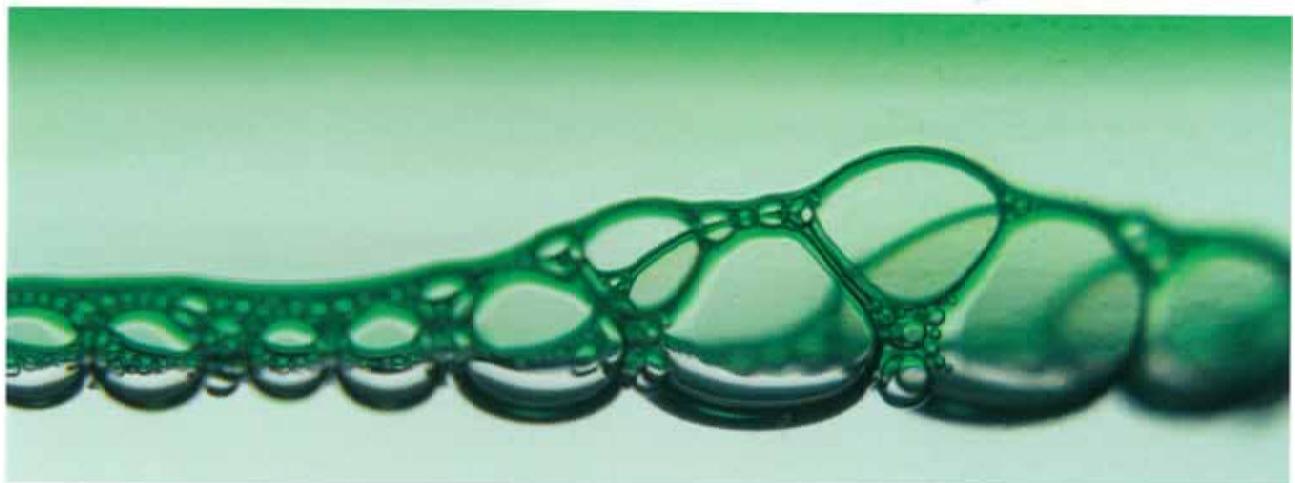
○海外から調達される原料等についての安  
全確保についても、残留農薬のチェックや現  
地視察を行っていることを伺いました。全工  
程において行き届いた厳しい管理を貫いて  
いることに、身近な製品のうらにある、会社側  
のたゆまぬ努力とよい商品を届けたいという  
情熱を深く感じました。



## ■～地域社会貢献～4

### 排水処理改善システム

当社では美しい地球環境を守るために、少しでも力になりたいと考えております。大切な水資源を利用していただいている当社は、特にその最終段階の排水処理水に関しては、法令の遵守、誠実・正直をモットーにこれからも真剣な取り組みで進めていきたいと考えております。当社では、特に排水が河川の環境に負荷軽減のために処理施設の浄化処理能力の向上に努めてまいりました。その結果、二つの排水処理施設は、いずれも活性汚泥処理を取り入れておりますが、一つは接触膜（バイオモジュール）を利用して多種多様な生物種を生成付着させ、汚れの原因である有機物を食物連鎖により分解処理する方法であります。もう一方は充填材の目詰まりを無くする為、連続洗浄方式という、ばつ氣槽の下部に設置した散気装置を回転させ充填材に付着した生物層による排水浄化を行ないながら、充填材洗浄を連続的行なう構造となっております。



## ■～地域社会貢献～ 5

### 汚泥処理改善システム

一般的に採用されている活性汚泥式の排水処理施設は、

工場排水を「ばっ氣槽」といわれるプールやタンクに入れて空気を送り込み

「活性汚泥(好気性菌の固まり)」を活発化させて有機物を処理し、浄化しています。

この方法では好気性菌により処理しきれない(食べきれない)「余剰汚泥」が最終的に残ってしまうことがあります。

汚泥は硬い細胞膜に覆われていて、そのままの状態では活性汚泥が

消化しきれないからであり、この余剰汚泥の最終処理方法が社会問題でした。

当社はこの汚泥を、アルカリ性にし、高温と圧力で処理をナノサイズの液化汚泥まで溶融して

再びばっ氣槽で処理する方法を採用しており、汚泥の減量化に大きく貢献しております。



## Haruna Group 環境会計

### ■環境会計の意義

当社では、環境への貢献を全社的に推進し、またその結果をステークホルダーの皆様にご理解いただくために、2003年より環境会計を導入し、以降四半期報告会で報告させていただく内容としてまいりました。環境会計は、グループ内部ではハルナ品質環境研究所が作成いたしますが、その基礎データは現場の各担当部署が集計し、環境への貢献度が高まるよう日々改善を行っています。月に1回、環境委員会が開催され、その会議で毎月のデータの報告、改善項目の発見と改善の進捗状況、今後の取組方針などが協議されます。当社は、今後も環境への貢献を推進していくための重要な分析および報告方法として、環境会計を充実させ改善を重ねていきます。



### ■啓発活動

#### 総合衛生管理委員会

HACCPシステムの維持管理及び更なる改善を目的として毎月1回委員会を開催しています。

#### 環境委員会

環境会計を推進させるとともに、社内のコストを分析し、提案改善を行う会議の実施。

#### 安全衛生委員会

職場における安全と健康を確保し快適な職場環境を形成し、労働災害の提案・徹底をさせる委員会。

#### 改善提案

災害の未然防止、環境保全、業務効率の改善等を全社員より提案要望しております。



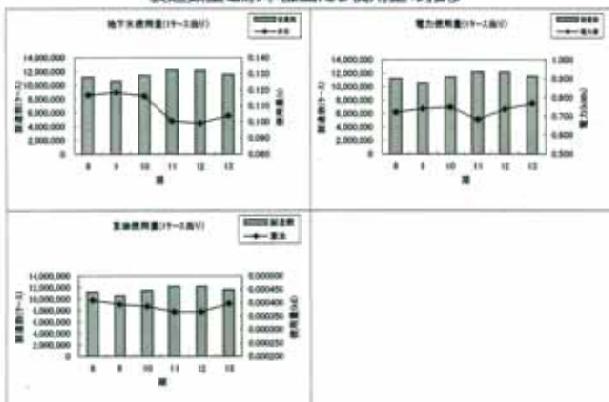
## ■環境保全コスト

### 環境活動のための設備投資額と経費

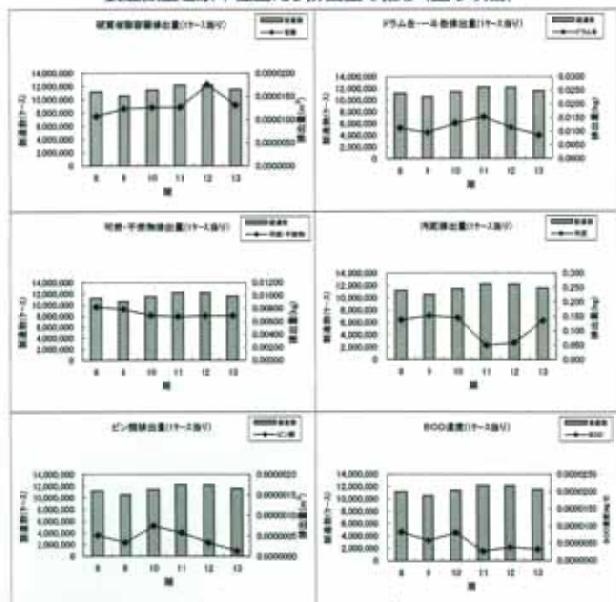
(単位:千円)

環境保全コスト				
分類		主な取組の内容及びその効果(ガイドラインより)	投資額	費用額
1. 事業エリア内コスト		生産・サービス活動により直接発生する環境負荷を抑制する取組みのためのコスト	128,992	52,080
内訳	① 公害防止コスト	公害防止(大気、水質、土壤、騒音、振動、悪臭、地盤沈下など)のためのコスト	120,530	13,652
	② 地球環境保全コスト	地球温暖化防止および省エネルギー、オゾン層保護などを行うためのコスト	3,000	11,735
	③ 資源循環コスト	廃棄物の削減・リサイクル・適正処理・水使用量の削減などを行うためのコスト	5,462	26,693
2. 上・下流コスト		生産・販売した製品、包装容器等の使用消費・破棄等の環境負荷を抑制するためのコスト	0	8,248
3. 管理活動コスト		環境システムの整備・運用、情報開示、広告、従業員広告などのコスト	0	10,595
4. 研究開発コスト		研究開発コストとして把握している研究開発活動のための人件費を含むコストのうち、環境保全に関わるコスト	0	6,312
5. 社会活動コスト		自らの事業活動に直接的には関係ないものの企業等の社会活動における環境保全に関する取組、又は情報公開など企業等が社会のコミュニケーションを図る取組のためのコスト	0	481
6. 環境損傷対応コスト		過去の汚染(地下水、土壤など)に関する調査および対策など、事業活動が環境に与えた損傷に関して生じたコスト	0	0
小計			128,992	77,716
合計				206,708

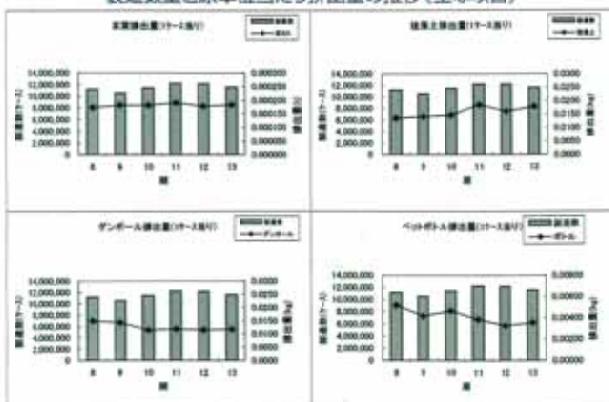
製造数量と原単位当たり使用量の推移



製造数量と原単位当たり排出量の推移(主な項目)



製造数量と原単位当たり排出量の推移(主な項目)



## ■環境保全効果

事業活動での直接・間接的環境負荷について、前年度同期と比較した  
環境パフォーマンス(物量値)の改善を表すもの

インプット	原材料	副資材	包装材料																																																	
	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">エネルギー</th> </tr> <tr> <th>使用量</th> <th>前年比</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>重油 4,603kl</td> <td>+8.6%</td> </tr> <tr> <td>電力 8,909,373kwh</td> <td>+3.8%</td> </tr> </tbody> </table>			エネルギー		使用量	前年比	重油 4,603kl	+8.6%	電力 8,909,373kwh	+3.8%	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">水資源</th> </tr> <tr> <th>使用量</th> <th>前年比</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>地下水 1,205,102m<sup>3</sup></td> <td>+4.8%</td> </tr> </tbody> </table>	水資源		使用量	前年比	地下水 1,205,102m <sup>3</sup>	+4.8%																																		
エネルギー																																																				
使用量	前年比																																																			
重油 4,603kl	+8.6%																																																			
電力 8,909,373kwh	+3.8%																																																			
水資源																																																				
使用量	前年比																																																			
地下水 1,205,102m <sup>3</sup>	+4.8%																																																			
 エネルギーコストの削減及び節水対策として温排水再利用設備を導入しております。																																																				
製造	<b>製品</b> (11,586,962c/s)																																																			
	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="3">CO<sub>2</sub>、NO<sub>x</sub>及びSO<sub>x</sub></th> </tr> <tr> <th>排出量</th> <th>前年比</th> <th>削減効果</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>CO<sub>2</sub> 15,840,400kg</td> <td>+7.5%</td> <td>-1,108,317kg</td> </tr> <tr> <td>NO<sub>x</sub> 12,268kg</td> <td>+7.5%</td> <td>-860kg</td> </tr> <tr> <td>SO<sub>x</sub> 6,981kg</td> <td>+8.6%</td> <td>-552kg</td> </tr> </tbody> </table>		CO <sub>2</sub> 、NO <sub>x</sub> 及びSO <sub>x</sub>			排出量	前年比	削減効果	CO <sub>2</sub> 15,840,400kg	+7.5%	-1,108,317kg	NO <sub>x</sub> 12,268kg	+7.5%	-860kg	SO <sub>x</sub> 6,981kg	+8.6%	-552kg	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="3">CO<sub>2</sub>、NO<sub>x</sub>及びSO<sub>x</sub></th> </tr> <tr> <th>排出量</th> <th>前年比</th> <th>削減効果</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>排水 1,077,845m<sup>3</sup></td> <td>+5.1%</td> <td>-52,755m<sup>3</sup></td> </tr> <tr> <td>水質汚濁物質 3,367kg</td> <td>-20.4%</td> <td>863kg</td> </tr> </tbody> </table>	CO <sub>2</sub> 、NO <sub>x</sub> 及びSO <sub>x</sub>			排出量	前年比	削減効果	排水 1,077,845m <sup>3</sup>	+5.1%	-52,755m <sup>3</sup>	水質汚濁物質 3,367kg	-20.4%	863kg																						
CO <sub>2</sub> 、NO <sub>x</sub> 及びSO <sub>x</sub>																																																				
排出量	前年比	削減効果																																																		
CO <sub>2</sub> 15,840,400kg	+7.5%	-1,108,317kg																																																		
NO <sub>x</sub> 12,268kg	+7.5%	-860kg																																																		
SO <sub>x</sub> 6,981kg	+8.6%	-552kg																																																		
CO <sub>2</sub> 、NO <sub>x</sub> 及びSO <sub>x</sub>																																																				
排出量	前年比	削減効果																																																		
排水 1,077,845m <sup>3</sup>	+5.1%	-52,755m <sup>3</sup>																																																		
水質汚濁物質 3,367kg	-20.4%	863kg																																																		
アウトプット	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="6">廃棄物</th> </tr> <tr> <th colspan="3">再資源化</th> <th colspan="3">非再資源化</th> </tr> <tr> <th>項目</th> <th>前年比</th> <th>項目</th> <th>前年比</th> <th>項目</th> <th>前年比</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>茶葉</td> <td>+3.3%</td> <td>珪藻土</td> <td>+11.5%</td> <td>ビン類</td> <td>-60.5</td> </tr> <tr> <td>ペットボトル</td> <td>+9.8%</td> <td>硬質樹脂容器</td> <td>-25.6%</td> <td>可燃物 不燃物</td> <td>-2.7</td> </tr> <tr> <td>ダンボール</td> <td>+1.4%</td> <td>原材料</td> <td>-</td> <td>木パレット 木くず</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>ドラム缶・ 一斗缶</td> <td>-25.6%</td> <td>フィルム状樹脂 PP/バンド</td> <td>+199.0%</td> <td colspan="2"></td> </tr> <tr> <td>汚泥</td> <td>+132.5%</td> <td>紙類</td> <td>-</td> <td colspan="2"></td> </tr> </tbody> </table>				廃棄物						再資源化			非再資源化			項目	前年比	項目	前年比	項目	前年比	茶葉	+3.3%	珪藻土	+11.5%	ビン類	-60.5	ペットボトル	+9.8%	硬質樹脂容器	-25.6%	可燃物 不燃物	-2.7	ダンボール	+1.4%	原材料	-	木パレット 木くず	-	ドラム缶・ 一斗缶	-25.6%	フィルム状樹脂 PP/バンド	+199.0%			汚泥	+132.5%	紙類	-		
	廃棄物																																																			
再資源化			非再資源化																																																	
項目	前年比	項目	前年比	項目	前年比																																															
茶葉	+3.3%	珪藻土	+11.5%	ビン類	-60.5																																															
ペットボトル	+9.8%	硬質樹脂容器	-25.6%	可燃物 不燃物	-2.7																																															
ダンボール	+1.4%	原材料	-	木パレット 木くず	-																																															
ドラム缶・ 一斗缶	-25.6%	フィルム状樹脂 PP/バンド	+199.0%																																																	
汚泥	+132.5%	紙類	-																																																	

注)

\*1 前年比は原単位当りの値になります。

\*2 削減効果は原単位あたりの削減量から算出しております。

\*3 二酸化炭素換算値およびNO<sub>x</sub>換算値につきましては、

2002年4月の環境省「環境活動評価プログラム」の係数を用いております。

\*5 原材料(廃棄物)及び紙類、木パレット・木くずの前年比欄は前年該当期間に排出がなく  
前年比を算出できないため記載しておりません。

\*6 昨年度の11月よりフィルム状樹脂・PP/バンドを再資源化しています。

\*7 今年度の8月より可燃物の一部を分別し紙類として再資源化しています。



## ■環境保全効果の金額換算

分類	金額(千円)
CO <sub>2</sub> 排出量の削減	△ 10,474
NO <sub>x</sub> 排出量の削減	△ 57
SO <sub>x</sub> 排出量の削減	△ 28
合計	△ 10,559

注)

\*1 金額換算化係数は日本で各環境負荷量1トンを抑制するための費用により算出

\*2 CO<sub>2</sub>=9,450円/トン京都議定書の目標達成のためのCO<sub>2</sub>排出抑制費用(環境省試算値)

\*3 NO<sub>x</sub>=66,315円/トン過去の環境負荷抑制費用の推定値より設定(旧経済企画庁の研究成果)

\*4 SO<sub>x</sub>=50,159円/トン過去の環境負荷抑制費用の推定値より設定(旧経済企画庁の研究成果)

## ■企業内経済効果

分類	金額(千円)
事業場エネルギーの削減	27,618
廃棄物処理費用の削減	△ 4,074
地下水使用量の削減	198
調合液廃棄量の削減	2,562
合計	26,304

注)

\*1 事業場エネルギーの削減額は、自家発電装置導入による重油単価削減メリットを基に算出しております。

\*2 廃棄物処理費用の削減額は、各々のコスト単価と原単位あたりの削減量を基に算出しております。

\*3 地下水使用量の単価は36円/トンで計算しております。

(旧経済企画庁の環境・経済統合勘定より)

\*4 調合液廃棄量の削減額は各々の原材料単価と廃棄量を基に算出しております。

環境報告  
について



株式会社ハルナ品質環境研究所  
執行役員 兼 品質環境本部本部長  
古市 直也

ハルナビパレッジでは2003年度に初めて四半期報告会で環境会計を公表致しました。公表以来、環境負荷を低減するため環境委員会を中心として、省エネルギー対策や廃棄物の再資源化、減量化対策に取組んできました。

多品種・少量生産が今後更に増加していくと考えられますが引き続き省エネ・省資源の視点で生産プロセスの改善に取組む等、より一層の環境負荷の低減に全社一丸となって取組んでいきます。

また、今後は環境負荷の低減のみでなく環境にプラスとなる活動も行ない環境経営の実現に向けた取組みを進めていきたいと考えています。



## 具体的な取組み

### ■過去に取り組んだ環境に対する主な内容

#### 環境方針の制定

経営の重要課題である環境問題に取組むため、企業理念に基づいて環境の基本理念を制定すると共に具体的な行動指針を定めました。

#### 環境施設(緑地)面積の確保

工場立地法で定められている環境施設及び緑地面積を確保するための整備を実施しました。

#### 排水処理施設の能力向上のための改修工事

廃棄物となる汚泥の排出量を削減するため第2排水処理施設の改修工事を実施しました。

#### 排水処理施設汚泥量の削減効果

廃棄物となる汚泥の排出量を削減するため第2排水処理施設の改修工事を実施しました。

○対策効果／汚泥排出量：-53.7%  
金額換算効果：914,057円

\* 削減金額については、企業内経済効果の廃棄物処理費用削減項目に含む



#### 廃棄物処理費用の見直し効果

ドラム缶、硬質樹脂(ラベル、キャップ)の処理費用の見直しを実施しました。

○対策効果／金額換算効果：893,334円

#### 紙類の再資源化

2007年7月より可燃物として排出していた一部の紙類を分別排出することで再資源化しています。  
引き続き廃棄物の再資源化に取組んでいきます。

#### 排水処理施設汚泥量削減の推進

排水処理施設から廃棄物として排出される汚泥量を削減するため第1排水処理施設に汚泥減量化装置を導入しました。この装置は排水処理場で発生する有機汚泥を溶解するもので、排水処理施設での微生物の自己消化率を向上させ汚泥の排出量を削減します。・現在本格稼動に向けて試運転を行なっています。



## ■代表者の社会貢献

当グループでは顧客思考を理念とし、研究・教育・社会貢献の推進にとりくんでいます。なかでも創業者であり、現在、グループ代表の青木清志は、経営者、起業家として、様々なステークホルダーとの交流を図るなか、地元大学や地元団体をはじめとする教育機関への講義、講演、委員として、社会貢献を積極的に行っております。起業経験を活かし、受講頂く皆様へ、夢や希望を育み、高い志と明確な目的意識を持って進む力を育てたいという意志の基、社会活動を行っています。

・群馬大学 社会情報学部 非常勤講師	「企業論」経営史学	平成13年4月～平成17年3月
・高崎経済大学 地域政策学部 特別講師	「ベンチャービジネス論」提供:日本政策投資銀行、野村證券	平成13年11月21日
・法政大学 大学院ビジネススクール経営学部 特別講師	「市場の発見」	平成14年6月15日
・群馬大学 大学院社会情報学研究科 特別講師	「企業・産業分析スキル」提供:野村證券	平成14年11月27日
・群馬大学 大学院社会情報学研究科 特別講師	「ビジネスプラン策定スキル」提供:野村證券	平成15年1月22日
・上武大学 経営情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成15年5月8日
・上武大学 ビジネス情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成16年5月21日
・上武大学 経営情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成16年5月12日
・法政大学 大学院社会情報学研究科講師	「起業家の決断」	平成16年5月19日
・上武大学 経営情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成17年5月11日
・上武大学 ビジネス情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成17年5月26日
・高崎経済大学 経済学部	大学と地場企業との連携講座「新しいビジネス戦略を求めて」	平成18年1月24日
・高崎経済大学 経済学部	大学と地場企業の連携講座「創出と現場力を考える」	平成18年2月23日
・法政大学 大学院ビジネススクール経営学部 特別講師	「企業家のビジョン」	平成18年5月10日
・上武大学 ビジネス情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成18年5月24日
・上武大学 経営情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成18年6月8日
・高崎経済大学 経済学部	「新地場産業としての飲料メーカーを創業して」	平成18年11月8日
・上武大学 ビジネス情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成19年5月16日
・上武大学 経営情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成19年5月24日
・群馬大学 共同研究イノベーションセンター 客員教授	「ビジネスと社会貢献」	平成19年11月8日
・群馬大学 共同研究イノベーションセンター 客員教授	「事業アイデアの創出と強化」	平成19年11月21日
・群馬大学 共同研究イノベーションセンター 客員教授	「組織構造とアライアンス」	平成19年12月6日
・群馬大学 共同研究イノベーションセンター 客員教授	「起業塾～循環の経営を考える～起業とは楽しいものです」	平成19年12月14日
・上武大学 ビジネス情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成20年5月21日
・上武大学 経営情報学部 特別講師	「トップマネジメント講話」	平成20年5月22日

### 講 演

・新事業前出講演会	「起業家成長の鍵」	主催 群馬県中小企業振興公社	平成13年3月15日
・公開バーネルディスカッショն	「創業」	主催 高崎経済大学地域政策学部 高崎青年会議所	平成13年5月29日
・日本経済新聞金曜会	「私の経営理念」	主催 日本経済新聞前橋支局	平成13年9月7日
・シニアベンチャーセミナー	「創業のすすめ」	主催 商工労働部経営支援課	平成13年10月20.21日
・ぐんま・農業未来塾	「元気の出る経営戦略」	主催 群馬県農政部農政課	平成14年1月29日
・高齢者創業合宿セミナー	「創業」	主催 群馬県農政部農業開拓課	平成14年2月13日
・ぐんま・農業未来塾	「日本の農業の展望」	主催 群馬県農政部農政課	平成14年9月4日
・次世代産業創造戦略会議	「群馬環境構想」	主催 商工労働部産業政策課	平成14年10月29日
・就職支援セミナー＆ガイダンス	「働き方・生き方」革命	主催 商工労働部職業能力開発課	平成14年12月7日
・環境生活文化領域分科会	「環境事業の近未来」	主催 群馬県産業支援機構	平成15年4月22日
・高崎市青年団体連絡協議会	「元気が出来る経営」	主催 高崎青年会議所	平成17年5月18日
・高崎セントラルロータリークラブ	「知識製造業への変革」	主催 高崎セントラルロータリークラブ	平成18年3月14日
・関東商工会総会 基調講演	「経営概観」	主催 関東商工会	平成18年7月4日
・(株)NHKコンピューターサービス講演	「新規事業改革」	主催 (株)NHKコンピューターサービス	平成18年7月19日
・財団法人日本立地センター講演	「産業立地と地域再生」	主催 財団法人日本立地センター	平成18年11月9日

・群馬県商工労働部産業政策課 生活を豊かにする次世代産業創造懇親会議	コア会議委員
・地域研究開発促進拠点支援事業 環境生活文化領域分科会	委員
・北関東産官学研究会	顧問
・エコライフデザイン研究会	法人企業会員
・NPO法人北関東バイオフォーラム	会員
・高崎経済大学	非常勤講師
・国立大学法人群馬大学 共同研究イノベーションセンター	客員教授



## ■代表者の社会・広報活動

### メディア

群馬テレビ	【ビジネスジャーナルビジネス夕】	平成 8年 8月16日放映
群馬テレビ	【ほしん元気情報】	平成13年 6月30日放映
群馬テレビ	【ぐんま with you】	平成13年 11月30日放映
群馬テレビ	【ニュースジャストエヌ 屋官共同研究発表】	平成15年 10月23日放映
群馬テレビ	【財部誠一の群馬元気情報】	平成15年 12月23日放映
群馬テレビ	【ひる生情報】野村のびっくあっこ企業探訪】	平成16年 5月30日放映
群馬テレビ	【ニュースジャストエヌ ピックアップ群馬】	平成17年 5月18日放映
群馬テレビ	【財部誠一の群馬の元気をバックアップ】	平成17年 12月21日放映
群馬テレビ	【ビジネスジャーナル ホットすぐらんまる】	平成19年 1月12日放映
群馬テレビ	【ニュースジャストエヌ タニガワピ(レッジ竣工式】	平成20年 3月27日放映

### 出版

・群馬経済ガイドブック	「キラリと光るユニーク企業」	平成11年10月23日号
・週刊ダイヤモンド	「10年後の売上高伸び率ランキング」	平成11年10月30日号
・月刊じょうほう	「株式公開を目指すボトル飲料メーカー」	平成12年 6月 5日号
・月刊ベンチャーリンク	「情報開示で他社に苦づ」	平成13年 7月15日号
・ビジネスプラザ	「私の経営」	平成14年12月13日号
・県内企業トップ7人の原点	「起業に年齢は関係ない」	平成15年 6月25日号
・商工たかさき	「ハルナビ/ハッジが創立10周年記念式典」	平成18年 3月15日号
・高崎セトモ-リーフア	「製造業への変革 企業価値を創造する人材育成」	平成18年 3月28日号
・商工たかさき	「今月の人 経営者像」	平成19年 1月15日号
・財団法人日本立地センター	「シニアベンチャーの経営戦略」	平成19年 5月 1日号

## ■ITシステム会議の実施によるペーパーレスの徹底

当社では、2006年1月より全社のIT化に着手し、社内で開催される会議は、原則として全てパソコン会議とすることとしました。全員がパソコンで会議することによって、社内でのペーパーレス化を徹底、環境にやさしい企業を目指しています。また、パソコン会議導入以前の会議では、会議で配布される資料には、顧客情報や財務情報など様々な重要データが混在する可能性がありました。会議をペーパーレス化することによって、それらの重要なデータは、ペーパー資料とすることなく、またアクセス制限を設けることなどによって、より適正に管理することができるようになりました。



パソコン会議では、会議出席者は、特別なハードウエアを必要とせず、ソフトウェアのインストールだけでパソコン画面の転送を実現するだけです。



2年を経過し、今後はグループ全社間でのITシステムを強化し、ペーパーレス環境対策を広げていく計画です。

発注業務、基準書などの文書類から計画の進捗管理、記録、環境教育資料まで、EMS関連業務や書類をすべてインターネットで電子情報により運営・管理を目指します。

今後も、常に紙の使用量削減をめざし、電子情報化を徹底していく予定です。

